

〈論文〉

無垢な目を持つ少女の記す昼と夜、そして the blind mother の存在
—George MacDonald の “The History of Photogen and
Nycteris” における生と死—
Day and Night Observed by the Girl with Innocent Eyes and
the Existence of Her Blind Mother: Life and Death in George
MacDonald’s “The History of Photogen and Nycteris”

隈部 歩

Abstract

In George MacDonald’s “The History of Photogen and Nycteris,” Watho, a witch who desires to know everything, raises Photogen and Nycteris to create in them incarnations of day and night respectively. It can be said that the witch intends to detach death from life by dividing this life into night and day and through creating their incarnations. However, in fact Photogen (the Day Boy) and Nycteris (the Night Girl) are not perfect oppositions. Although she is “the Night Girl”, she has not known night as well as day because Watho has shut her in the tomb since the girl’s birth. The purpose of this paper is revealing the author’s notion about life and death by paying attention to the process that Nycteris goes through out of the tomb and getting to know night and day outside. For this purpose, we also focus on two overlooked things about women. The one is the fact that Nycteris is not a perfect contrast to Photogen, and the other is the unseen relationship between Nycteris and her blind mother Vesper, who already has died (gone out) . For Nycteris, who has known neither night nor day, night is seen as “birth,” day as “death,” which we mortals cannot describe. In addition, we also regard Nycteris’ experience of going out as Vesper’s, and make their unseen relationship seen. By seeing the world through Nycteris’ innocent eyes and revealing the unseen relationship between her blind mother and her, we can experience birth and death vicariously and receive the joy of and courage for life.

1. 序論

George MacDonald (1824-1905) の書いた最後のフェアリーテールである “The History of Photogen and Nycteris (The Day Boy and the Night Girl)” (1879) は、¹ 全てを知りたいと望む魔女 Watho の実験により、それぞれ昼と夜の権化となるように育てられた「昼の少年」Photogen と「夜の少女」Nycteris が登場する。そして、彼等が互いを助け、欠けたものを補い合って自身と対極にあるものを克服し、魔女の試みを破綻させる過程が描かれている。先行研究では、主に3つの傾向が有り、そのそれぞれに問題

点が見受けられる。1つ目は、昼と夜を二分する Watho の態度を、想像力に対立する不毛な理性や科学と見做し、Photogen と Nycteris の体現する相反した2つのものの融和の重要性を論じるものである。例えば Rolland Hein は、Watho の実験を “The evil effect of a purely rationalist approach to life” と見做し、本作品において “Rationalist frictions are reduced in importance, and people may find underneath them a basis for mutual understanding.” (182-83) と述べる。確かに、MacDonald 作品では想像力や、相反する2つのものの融和は重要なものとして描かれているが、² 先行研究のこの傾向において、「昼の少年」Photogen と「夜の少女」Nycteris を対等な反対物として捉えられているところに問題がある。なぜなら、夜を割り当てられた Nycteris は、生まれた時から地下の墓地で閉じ込められて育ったため、彼女にとって外の世界の夜は昼同様未知であり、Photogen と単純な二項対立の存在ではないことに留意する必要があるからである。

2つ目の傾向は、Nycteris が最後に言及する “a day as much greater than your [Photogen’s] day” (341) と MacDonald の信条である「死後に有るより豊かな生」の類似を指摘するものである。³ 例えば、Cynthia Marshall は、Nycteris のこの言葉は “the Pauline notion of life on earth as a dark shadow of the reality beyond” や、“the Augustinian idea that night and day are mere gradation of light, that darkness is the lowest rung on a ladder of light extending ultimately into heavenly incandescence.” (64) を示唆するものだと指摘する。⁴ J. R. R. Tolkien (1892-1983) が、“Death is the theme most inspired George MacDonald” (68) と妖精物語に関するエッセイの中で述べていることが象徴しているように、MacDonald 作品を論じる上では、死生観は最も重要なテーマであると言っても過言では無い。⁵ しかしながら、先述の Nycteris の言葉に着目して、本作品に作者の「死後に有るより豊かな生」という死生観が描かれていると指摘されることはあるものの、作品に散りばめられている「誕生」や「生」については十分な考察がこれまでなされて来なかった。MacDonald 作品では、死や死後の生が着目されがちであるが、本作品には、Watho が2人の若い妊婦を城に呼び寄せ、生まれた赤ん坊を彼女が自分の実験に合うように育てたことや、子供達がそれにいかに抵抗したかが描かれていること、そして MacDonald の伝記作者 William Raeper が指摘するように、本作品の草稿にて、Watho が妊婦の腹を切り裂いて中で成長する胎児の様子を観察する姿が描かれていることから、先行研究で軽視されて来た「誕生」や「生」も考察する必要がある。Raeper は、削除されたこの暴力的な場面について、“Such uncoverings of the dark side of the psyche, adapted from German romanticism, reveal an unexpected element of violence in MacDonald’s imagination.” (316) と指摘しているが、これは生命の神秘を知りたいという欲望の表れとしても読み取れる。なぜなら、MacDonald は、人の成長について論じた評論 “A Sketch of Individual Development” (1880) の冒頭で、誕生前やその瞬間の知り得なさやそれを知りたい欲求を述べていることから、彼は「誕生」や「生」に高い関心を持っていたことが窺われ、これらのテーマは彼の作品を読み解く上で欠かせないと考えられるからだ。⁶

3つ目は、極端に二分されて育てられた Photogen と Nycteris の姿を当時のジェンダー観に照らして論じたものである。例えば、Roderick McGillis は、本作品の Photogen と Nycteris は “the male is dependent upon the female (and vice versa) in MacDonald’s fairy tales” (97) を示すものであり、“For MacDonald, the fairy tale’s very form is dependent upon the mutual dependence of reality and fantasy, clarity and translucence, meaning and mystery.” (97) と述べてこの相互依存は作品形式そのものを反映していると指摘する。Osama Jarrar は、ヴィクトリア朝のジェンダーやセクシュアリティの規範、性役割について論じており (43-46)、Kerry Dearborn は本作品において “MacDonald humorously exposes the falseness of Victorian gender stereotypes.” (30) と述べている。更に、Bonnie Gaarden は、Photogen と Nycteris は “presumably as a result of their upbringing, exhibit extremes of traditional gender difference” を示しており、“MacDonald isolates and emphasizes their differences in order to stress their complementarity.” (182) と結論付けている。確かに、少年と少女を対照的な方法で育てる様子が描かれた本作品を、当時のジェンダー観に照らして論ずるのは重要な視点であるが、これらの研究も、1つ目の傾向と同様に Nycteris と Photogen を二項対立の存在として捉えたり、彼女を Photogen の単なる補完物として見做したりしているところに問題が有る。更には、Sally Mitchell が、1870 年頃に独自の価値や関心を持つ独立した時期としての「少女時代 (girlhood)」が確立され始め、それ以降小説にも少女が多く登場するようになったと述べていることから (1)、丁度その時期に当たる本作品の少女像の分析は重要である。そのため、Nycteris を Photogen の単なる補完物としてではなく、彼女自身について綿密な考察をする必要が有るのだ。

本稿の目的は、魔女 Watho の実験の意図や、先行研究が見過ごしていた Nycteris と Photogen は完全なる二項対立の存在ではないという事実に注目することで、筆者の死生観や女性像を明らかにすることである。ここで鍵を握るのは、“go out” という言葉である。この言葉の重要性は、単に作品中で多用されているだけでなく、「(光が) 消える」、「外へ出て行く」、「死ぬ」という3つの異なる意味で用いられていることや、Nycteris の go out した先の世界へ思いを馳せる言葉で作品が締め括られている (“‘But who knows,’ Nycteris would say to Photogen, ‘that, when we *go out*, we shall not go into a day as much greater than your day as your day is greater than my night?’” (341, 強調引用者)) ことにも示されている。本稿では、Photogen とは違い Nycteris にとっては夜も昼も未知であることに着目して、彼女が閉じ込められていた地下の墓から “go out” して外の世界を知って行く様子を分析し、その何も知らない無垢な目を通した世界の記述から作者の死生観や女性像 (少女の成長) を読み解く。更に本稿では、Nycteris を出産した時に亡くなり、その後作品に登場しないため先行研究で顧みられることの無かった盲目の (blind) 母 Vesper にも目を向け、作品上でははっきり見ることのできないこの母娘の繋がりから浮き彫りにされる作者の死生観や女性像 (母娘関係) をも考察する。⁷

2. 魔女の実験—昼の少年と夜の少女を創り上げることによる生と死の分離

本節では、魔女 Watho の実験—彼女がいかにして「昼の少年」と「夜の少女」を創り上げて光（昼）と闇（夜）を二分しようとしたか—を考察し、それが生と死を分離する試みであることを明らかにする。或る日、Watho は Aurora と Vesper という 2 人の若い妊婦を城に呼び寄せる。表 1 に示したように、この 2 人の女性は内面・外見共に対照的であるだけでなく、Watho の彼女達に対するもてなし方も異なっており、魔女の生と死を二分する実験は既に母親達への対応から始まっていたことが分かる。これは、Watho が母と子の生命の繋がりや影響力の強さを認めていたことや、彼女の実験の目的が「生命」に関わる神秘であることを表すだろう。

表 1

	Photogen の母 Aurora	Nycteris の母 Vesper
名前の意味	ローマ神話の曙の女神。(ギリシャ神話の Eos に当たる。) ⁸	夕暮れ、宵の明星。また宵の明星は Hesperus (Hesper) とも表記されるので、ギリシャ神話の黄昏のニンフ Hesperides との関連も指摘できよう。 ⁹
身分や姿	宮廷人であり、夫は任務のため遠方へ行っていた。金髪で白い肌、空の様な青い瞳を持ち、常に微笑んでいる。	最近夫が亡くなり、それ以来盲目となった。黒い瞳と長いまつ毛、肌理が細かく暗い銀色のような肌を持ち、哀しみから来る美しさを湛えている。
待遇の違い	<ul style="list-style-type: none"> ・城の最上階に有る、南向きの広い部屋が幾つも有る居住スペースを与えられた。部屋は日当たりが良く、窓から美しい景色が見えた。 ・楽器や本、絵等も楽しむことができた。 ・狩りで捕った鹿や鳥の肉、牛乳や日光のような色のワインを与えられた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前の所有者がエジプトの王の墓を模してデザインした地下の部屋を与えられた。中には石棺が有り、部屋の壁や天井には絵が描かれていた。空気は循環しているが、窓は無く日光は全く入らない。 ・Watho は Vesper に悲し気な音楽と物語を聴かせて、常に彼女を“an atmosphere of sweet sorrow” (306) の中にいさせるようにした。 ・牛乳や、石榴石のような色のワイン、石榴や葡萄、沼地に住む鳥の肉を与えられた。

Aurora は、日光を連想させる“hair of the yellow gold, waved and rippled”と昼の晴れた空のような “[eyes] of the blue of the heavens when bluest” (305) を持っていた。加えて、彼女の身体は“delicate but strong” (305) で常に微笑みを湛えた快活な女性であり、生に満ちた「昼の少年」を産むのに相応しい人物であった。対照的に、Vesper は、最近夫を亡くして以来盲目となった生気の無い女性であった。死と盲目が結び付けられていることは、Nycteris が擬似的に体験する「死」や Nycteris と Vesper の関係性を論じる上でも鍵を握るため、第 4・5 節でも言及する。また、Vesper の “she always looked as if she

wanted to lie down and not rise again” (305) という姿は、彼女が内なる悲しみに負け、気持ちが死に向かっていることを示唆する。夜を思わせる豊かな黒髪と黒い瞳を持ち、哀しみから来る美しさを湛えている Vesper は、生を奪われた「夜の少女」の母となるのに適していたと考えられる。

その後 Aurora は輝くような男の赤ん坊を産んだが、Watho は自身の目的を達成しようと “[her baby] never cried but once, dying the moment he was born.” (306) と嘘をついたため、哀しみに打ちひしがれた Aurora は城を去った。他方で、もう 1 人の妊婦 Vesper は、暗い地下墓地の中で女の子を産み、そのまま亡くなってしまう。2 人の女性が出産する場面も、実に対照的であった。Photogen の誕生は、“a splendid boy was born to the fair Aurora. Just as the sun rose, he opened his eyes.” (306) と表現され、光や生と密接に結び付いたものであった。一方で、Vesper の出産の場面は、死の雰囲気満ちていた。

Five or six months after the birth of Photogen, the dark lady [Vesper] also gave birth to a baby: in *the windowless tomb* of **a blind mother**, in *the dead of night*, under the feeble rays of a lamp in an alabaster globe, *a girl came into the darkness with a wail*. (307, 強調・太字・下線引用者)

死を連想させる “the tomb” や “the dead of night” といった語が多用され、「産まれる (see the light)」とは全く反対の「嘆き悲しみと共に闇の中に産まれた」Nycteris は、産まれた瞬間に既に死んでいるかのようなのである。そして、Nycteris の存在が Watho と彼女の侍女 Falca 以外に知られておらず、社会的に「無」の存在であるのは、彼女が生命を奪われた「死」の存在であることを強調する。「盲目・見えない (blind)」母から産まれた Nycteris 自身も、外界に対して盲目であると共に社会から見えない、二重の意味で “blind” な存在なのである。

2 人の赤ん坊は誕生時から対照的であることに加えて、表 2 に示す通り Watho は自身の目的を達成させるために、明確に二分された育て方をする。

表 2

	Photogen	Nycteris
母からの引き離され方	Watho が赤ん坊は死産であったと嘘をつき、母 Aurora を塔から去らせる。	母 Vesper は Nycteris 出産時に死亡。
名前の意味	“photogen” には「発光体」という意味が有る。注釈者 U. K. Knoepfmacher は彼の名前の意味は「光の子 (light's offspring)」だと指摘している (354)。	“nycti-” は「夜の」という意味の接頭語である。 ¹⁰ Knoepfmacher は、彼女の名前を「夜の生物 (night's creature)」と指摘している。また、ギリシャ神話の夜の女神 Nyx や、彼女の娘で不和の女神 Eris との関連も指摘できる。 ¹¹

<p>育てられ方</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・母と同じ城の最上階の日当たりの良い大きな部屋で育てられた。 ・昼しか知らないように育てられる。 <p>Watho は Photogen に日光を燦々と浴びせ、闇を知らせないだけでなく暗い色のものさえ見せない。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Watho は手ずから狩りを Photogen に教え、手に余るようになると狩人 Fargu に狩りの技術を指導させた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・母のいた地下の墓地に閉じ込められ、外界を知らないように育てられる。 ・夜しか知らないように育てられる。 <p>部屋にあるランプの明かり以外は一切光を与えられない。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Watho は、Nycteris にほとんど教育を施さず書物も決して与えなかった。¹² Watho は少女のことは Falca に任せきりで言葉を交わす場面も描かれない。
--------------	--	---

人間の赤ん坊に対して、科学の対照実験のような行いをする Watho の態度は実にグロテスクで残酷であり、Bonnie Gaarden や Björn Sundmark は彼女の振る舞いを科学の不毛さや残酷さに結び付けている。Gaarden は、Watho を “an experimental scientist” (182) と見做し、彼女の欲望は “a ‘maniac thirst for knowledge’, similar to ‘a maniac thirst for wine or blood,’ which leads scientific ‘investigations’ to torture animals in vivisection” であり、更には “Watho goes the vivisection one better in that she experiments on children.” (182) と述べ、彼女の欲望や実験の惨さを生体解剖論者と重ねて指摘する。同様に、Sundmark も、倫理的な考慮無しで人間の少年と少女に科学実験をする Watho の残酷さを、ナチスの医師 Joseph Mengele (1911-79) に類似するものだと指摘し、“Watho represents the sterility of a science which uses others as objects and which cuts up the totality of experience and creation in separate parts.” (12) と主張する。確かに、ヴィクトリア朝は産業化や科学による技術発展が著しかったため、Gaarden や Sundmark が指摘するように、作者 MacDonald は急速に変化する社会や科学偏重な態度を冷酷な Watho の姿として描き込むことで、それらへの懸念や抵抗を表したのかもしれない。しかしながら、本稿はそれに加えて、Watho の意図を探る上で、本作品の草稿にも注目したい。第 1 節で言及した通り、Raeper は “Similar cruelty is found in an early draft of ‘The History of Photogen and Nycteris,’ though it was later excised: the witch Watho ‘who desired to know everything,’ slits open a pregnant woman while she is asleep in order to peer at the growing workings of the embryo.” (316) と指摘している。Watho が誕生前の生命を無理矢理観察しようとしているこの残忍な姿は、通常知り得ない生と死に関わる神秘への欲望を示しているため、彼女の実験はそれに関わるタブーであったと考えられる。

昼一光と太陽一は一般的に生命を連想させることに加え、Photogen は “[the sun] is the soul, the life, the heart, the glory of the universe” (325) と述べているため、本作品において昼が生と密接に結び付いていると言える。更に、Photogen が闇・夜への恐れにより病気になってしまった時に、Watho が “Ill, indeed! after all she had done to saturate him with the life of the system, with the solar might itself!” (330) と怒り狂ったことは、彼女が太陽・光と生命を同一視していることや、昼と夜をそれぞれ生の世界と死の世界の見做

していることを示す。昼と夜の権化を創り上げることにより、Watho は生に満ちたものと生を奪われたものを見たい・知りたいと望んでいたのである。

2人の子供達に対する光の与え方に加えて、表2で示した通り、Wathoの彼等への心配りも対照的である。WathoはPhotogenがエネルギーや生命力に溢れた存在になるように心を砕くのに対して、彼女はNycterisに対しては無関心である。Wathoは少女に音楽だけは教えたが、他はほぼ何も教えず、彼女は少女の身体に関しては決して関心を払わなかった。¹³ Photogenの誕生について“Watho at length had her desire, for witches often get what they want: a splendid boy was born to the fair Aurora.” (306)と書かれている通り、魔女の望みは「生」の権化とするための輝くような男の赤ん坊を得ることであった。よって、Nycterisは彼女の試みにおいては、単なるPhotogenの否定一生を与えなかったらどうなるか—であるため、少女自身に対しては注意が払われなかった。そうして、Wathoは昼の世界にて生をたっぷり与えて少年を育てる一方、生を奪って夜の世界で少女を育てた。太陽や光を生命だと見做すWathoは、この世界を昼と夜に二分すること—「昼の少年」と「夜の少女」を創り上げること—によって、生を死から切り離そうとしているのである。

3. Nycterisの誕生一夜

i) 誕生前一ミニチュアの夜の世界

Wathoは、「昼の少年」Photogenと対照的な夜の権化となるようにNycterisを育てていたため、先行研究は2人の子供達を対等な対立物として捉えて来たが、彼等は厳密に言うところではないのである。生命=光・太陽からNycterisを遠ざけるのを徹底させようとするあまり、Wathoは少女を外の世界の夜ではなく、墓の中に閉じ込めて育てた。その結果、序論でも述べた通り、魔女の試みに反してPhotogenとNycterisは完全なる二項対立の存在とはならなかった。つまり、Photogenは昼のみ知っているが、Nycterisにとっては、外の世界の昼も夜も未知なのである。昼を「生」、夜を「死」として二分しているWathoの実験に則るならば、Nycterisは生と死をどちらも知らないことになる。加えて、Wathoと侍女のFalca以外は誰もこの少女の存在を知らないため、彼女は社会的に言えば、見えない・実在しない—母Vesper同様に“blind”な—存在なのだ。第2節にて、Nycterisは誕生した瞬間に既に死んだような状態であったと述べたが、彼女は完全に産まれていた訳ではなかった—誕生前の状態に留められていた—と言う方がより正確であろう。¹⁴

Nycterisが育った地下の墓地は、言わばミニチュアの夜の世界のようにであった。そこには、“various of the powers of Nature”を表す“the coloured bas-reliefs on the walls” (309)が有り、床に敷かれたカーペットには多くの植物や花々が描かれていた上、天井に吊るされた淡い光を放つランプは月の代わりをしていた。Wathoはこの太陽の光を完全に欠いたミニチュアの夜の世界を創り上げて少女を閉じ込めて育てることで、彼女に外界を知らせないようにしていたのである。

地下の墓に閉じ込められていたため、¹⁵ Nycterisにはほとんど自由が無く、彼女の生活には通常は許されるはずのものがほぼ全て欠けていたが、彼女は不幸せな訳ではなかった。

彼女は、自分の住んでいる墓を越えた世界について何も知らなかったが、彼女は現時点で持っているもの・していることに幾らかの喜びを感じていた。Nycteris は、彼女の頭上高くに吊るされた、部屋の中心に位置するランプの明かりに満足しそれに専心していたため、自分の影についてさえ気付かずその存在を知らなかった。これは、彼女が他者に関心を持っていないことを示唆するだろう。Nycteris は、墓の中に身体的にだけでなく、精神的にも閉じ込められていたのである。つまり、彼女は自分自身の中に制限されており、彼女に全てを与えてくれるランプに満足していたのだ。

Nycteris のこの現状に満足して周りに目を向けない・気付けない状態は、MacDonald が人の成長について論じたエッセイ“A Sketch of Individual Development”(1880)における成長の最初の段階と類似している。この段階では、人は、母親が全てを与えてくれるので現状に甘んじており、“The source, the sustentation, the defense of his being, the endless mediation betwixt his needs and the things that supply them, are all in one.”(24)なのである。Nycteris と同様に、この段階にいる人は、自分自身に閉じ込められており、MacDonald は“His waking is full of sleep, yet his very being is enough for him.”(25)と表現している。しかしながら、この人物は世界（他者）に目を向けることで、成長をし始めてもいる。

By degrees he has learned that the world is around, and not within him—that he is apart, and that is apart; from consciousness to self-consciousness. This is a second birth, for now a higher life begins. When a man not only lives, but knows that he lives, then first the possibility of a real life commences. By *real life*, I mean life which has a share in its own existence. (25, 強調原文通り)

このエッセイの中の人物のように、Nycteris もまた彼女の周りに世界が有ることを知り、“real life”を始めねばならない。すなわち、墓の中で彼女自身の中に閉じ込められていた Nycteris は、外に目を向けて、自分に無い／から奪われているものを知る必要が有るのだ。¹⁶ Watho の実験により夜と昼の両方共知らされず、二重に無知な状態にされて、言わば誕生前の状態に留め置かれていた Nycteris は、その苦境を打破して墓の外へ出る (go out) ことにより、生きている人間には通常記述しえない「誕生」と「死」の瞬間を擬似的に経験することになる。更には、私達は無垢な目を持つ Nycteris の記す世界から—彼女の無垢な目を通して世界を見ることで—これらの表し得ない事象追体験をすることができるのである。また、Nycteris による外の世界の記述と、前述した Watho の実験における生命=昼/死=夜という二分との間に生じるずれも、作品に表された死生観を読み解く上で鍵を握る。

ii) Nycteris の真の誕生—外の夜の世界

墓に閉じ込められていることを知らず、外界の存在に対して本で得た僅かな知識以外は

全く無知である Nycteris は、自身の住む地下の狭く制限された世界に満足して生きていたが、彼女は漠然と何か変化を求めていた。彼女は、自分の望むものが何であるのか正確には分かっておらず、彼女の望みを表現するのに最も近い言葉は“more room” (309) だろうと考えていた。この望みは、天井に吊るされた淡い光のランプを見ることで彼女にもたらされた。

And besides the operation of the light itself after its kind, the indefiniteness of the globe, and the softness of the light, giving her the feeling as if her eyes could go in and into its whiteness, were somehow also associated with the idea of space and room. (310, 強調引用者)

白という色は空白・空間を表すものである。そのため彼女の部屋のランプの淡く白い光は Nycteris に“the idea of space and room”を与え、より大きな空間や部屋への望みを彼女の中に芽生えさせる。しかしながら、Nycteris はランプの光を見ることで感じられる「空間や部屋」に満ち足りていたため、ただぼんやりとより大きな空間について考えるだけで、実際には自分の今いる場所を越えてそれらを探そうとしていなかった。また、ランプの光を見る時、彼女が自分の目がその白さの中に入り込んで行くかのように感じている通り、このランプは彼女をその光の白さの内に引き込むものであった。閉じ込められている Nycteris に「空間や部屋」という概念を持たせてはくれたものの、その白い光の表す「空間」の中に彼女を引き入れており、ランプの中、ひいてはそれを中心に据える地下墓地の部屋の中に彼女を留めるものであった。すなわち、彼女が起きている間決して消えないようにされていた(“never permitted to go out—while she was awake at least”(310, 強調引用者))このランプは、或る意味彼女が外へ行く (go out) のを妨げていたのである。

墓の中で単調な日々を送っていた Nycteris にも遂に変化が訪れ、彼女は期せずして“go out”することになる。或る日地震が起こり、ランプが壊れて消えたことにより、彼女は初めて閉じ込められた世界から出たいと望むようになったのである。ランプの光が消えて完全なる闇になり、“as if both her eyes were hard shut and both her hands over them” (310) と感じていた Nycteris は、暫くの間茫然としていたが、不意に Falca が“speak of the lamp going out”(311, 強調原文通り)していたのを思い出す。これまで Nycteris は、“out”がどんな意味なのか知らず、外へ出ること (go out) を思い付きもしなかったが、Falca の言葉を文字通りに受け取り、ランプが外へ出て行ったのだと考えてそれを見付けようと試みる。その時の彼女の様子は“The desire to go out grew irresistible. She must follow her beautiful lamp! She must find it! She must see what it was about!” (311) と描写されており、今まで感情の起伏も無く、ただ淡々と単調な日々を過ごしていた受動的・静的な少女に大きな変化が起ころうとしているのを読者に予感させる。¹⁷ また、“see the light”は「産まれる」という意味であるため、ランプの光を求め、見たいと願う彼女は、自らの力で産まれ出ようとしていると言えるだろう。

唯一知る世界である地下墓地の部屋から外へ出た Nycteris にとって、そこで初めて見て・感じた経験は彼女に至上の喜びをもたらすものであった。

[She] stood in a maze of wondering perplexity, awe, and delight... Before her was a very long and very narrow passage, broken up she could not tell how, and spreading out above and on all sides to an infinite height and breadth and distance—as if space itself were growing out of a trough. It was brighter than her rooms had ever been ... She was in a dream or pleasant perplexity, of delightful bewilderment. She could not tell whether she was upon her feet or drifting about like the firefly, driven by the pulses of an inward bliss. (312-13)

そして、“[Nycteris who] had been from her very birth a troglodyte, stood in the ravishing glory of a southern night, lit by a perfect moon” と静かなエクスタシーの状態で見詰めて、無垢な目を持つ彼女の外界での最初の経験は“a resurrection—nay, *a birth itself*, to Nycteris” (313, 強調引用者) と表現されている。誕生前の状態に留められていた Nycteris は、消えた (go out) ランプの光を求めて墓の外へ出る (go out) ことにより、真の誕生を果たしたのである。¹⁸

外へ出た Nycteris は、見るもの全てに生を認める。風が吹いた時、彼女は抱き締められ、撫でられたように感じ、それを“a woman's breath” (313) と表現する。そして Photogen と夜の庭園で初めて出会った時には、風について“*She is invisible, and I call her Everywhere, for she goes through all the other creatures, and comforts them. Now she is amusing herself, and them too, with shaking them and kissing them, and blowing them in their faces.*” (323) と述べて女性として擬人化している。¹⁹ また、彼女は川が生きていることを疑わず、部屋の中で飲んだり水浴びしたりする水はそれが死んだものだと見做すと共に、川を“a swift rushing serpent of life” (317) に対して幾分恐れを抱く。月が雲に覆われ、雨が降り出すと、Nycteris は雨を“the tears of the moon, crying because her children [clouds] were smothering her” (317) と捉える。彼女が最も心惹かれたのは花であり、それらを素晴らしい生き物だと見做す。

[Nycteris thought that] What wonderful creatures they were!—and so kind and beautiful—always sending out such colours and such scents... It was their talk, to show they were alive, and not painted like those on the walls of her rooms, and on the carpets. (322)

自然を生き物だと見做す Nycteris の考えは、古代の人々の自然に対する概念“*I-thou relationship*”に類似している。Robert A. Segal は、自然を「それ (it)」或いは「あなた (Thou)」と見做す 2 種類の人間と自然の関係性について“*An I-it relationship one*

is detached and intellectual. An I-Thou one is involved and emotional”, “To say that primitives experience the world as Thou rather than as It is to say that they experience it as a person rather than a thing” (41) と述べている。Nycteris の外界での経験は、彼女が自然を生命を持った親しみ有る「あなた」と見做し、“I-Thou relationship” を結んでいることを示す。²⁰ 皮肉にも、Watho の実験のお陰で、Nycteris は何も知らない無垢な目で世界を見ることにより、自然を生きたものとして捉え、この神秘的な「誕生」の経験を行うことができたのである。²¹

外の世界を見たことにより、Nycteris は自身が不十分な知識しか持っていなかったこと、いかに彼女の地下墓地での生活が不活発な制限されたものであったのかを悟り、“What a little ignorance her gaolers [Watho and Falca] had made of her! Life was a mighty bliss, and they had scraped hers to the bare bone!” (314) と考える。この場面において、彼女の無垢な目は “the eyes made for seeing… [which lets her see] what many men are too wise to see” (313) だと表現される。

What the vast blue sky, studded with tiny sparks like the head of diamond nails could be; what the moon, looking so absolutely content with light—why, she knew less about them than you and I! but the greatest astronomers might envy the rapture of *such a first impression* at the age of sixteen. Immeasurably imperfect it was, but false the impression could not be, for she saw with *the eyes made for seeing, and saw indeed what many men are too wise to see.* (313, 強調引用者)

初めて外へ出た、無垢な目を持つ Nycteris の記す世界は生命に満ち溢れており、彼女の目を通して、私達にはもはや記述不可能な誕生した時に見たり感じたりしていたかもしれないことを見る・経験することができるのである。

本作品において、“go out” は「死ぬ」の婉曲語として用いられている上、Watho の実験において夜は死と結び付けられているが、Nycteris の初めて “go out” した経験は、言わば彼女の「真の誕生」として描かれている。この「ずれ」は、MacDonald の「死後に有るより豊かな生」という信条を示唆するものであろう。更には、Nycteris は私達に記述し得ない「誕生の瞬間」を擬似的に経験させてくれる。彼女の「真の誕生」の経験は、この世に生まれることは喜びに満ち溢れていると示すものであり、彼女の無垢な目を通すことで私達は生を “a mighty bliss” (314) として見るのできるのである。

4. Nycteris にとっての擬似的な死—太陽の光、昼

本節では、地下の墓を “go out” した Nycteris が彼女にとってもう 1 つ知らないものであった昼の世界や、昼を象徴する太陽の光を見た時の彼女の様子から、作者の死生観を考察する。まだこの世界の半分（夜）しか知らない Nycteris にとって昼は大変異質なものであったため、彼女はそれを「死」だと見做すが、それへの恐怖を彼女がいかに克服する

かに注目することで、作者の死、そして生への観念が鮮やかに立ち現れて来る。

本作品における死生観を考察する上では、Nycterisの昼の世界の経験の前に、「昼の少年」Photogenの記す夜について見ておく必要が有る。彼の狩りの師匠Farguが或る日夜行動物についてうっかり漏らしてしまった時、Photogenは日が落ちた後どうなるか見たい欲求に駆られ、魔女Wathoの命令を破って夜の世界を見る。しかしながら、彼の知らなかった闇・夜は彼にとって耐え難く恐ろしいものであった。

The moment the sun began to sink among the spikes and saw-edges, with a kind of sudden flap at his heart a fear inexplicable laid hold of the youth; ... When the last flaming scimitar-edge of the sun went out like a lamp, his horror seemed to blossom into very madness. Like the closing lids of an eye—for there was no twilight, and this night no moon—the terror and the darkness rushed together, and he knew them for one. (319)

今まで感じたことの無い恐怖に圧倒されたPhotogenは、城へと一目散に逃げ帰ろうとするが、辿り着く前に恐怖のあまり城の構内の庭で気絶してしまう。²² WathoやFalcaにばれないように、隙を見ては外の世界へ出ていたNycterisは、気を失って倒れているPhotogenを見付け、彼が意識を取り戻すまで看病し、闇に怯える彼を夜の間中守ってあげた。Wathoの第一の目的である、昼=生の権化となるように育てられたPhotogenの夜に対する反応から分かるように、Wathoの実験では夜や闇は「死」側のものとして想定されているのである。

闇に怯えるPhotogenを保護するため、Nycterisは通常であれば寝ているべき日の出の時間まで初めて外に居ることになった。この時彼女が初めて昼やその象徴である太陽を見て感じた驚きや恐怖は、正に「死」そのものであった。

Yes! yes! *it was coming death!* She knew it, for it was coming upon her also! She felt it coming!... *Anyhow, it must be death;* for all her strength going out of her, while all around her was growing so light she could not bear it! She must be blind soon! *Would she be blind or dead first?* (327, 強調引用者)

彼女の母親Vesperと同様に、Nycterisにとっても盲目と死が密接に結び付けられているのは注目し値する。Nycterisは目が見えない状態で腕をPhotogenの方へ伸ばして、“Oh, I am so frightened! What is this? It must be death! I don't wish to die yet. I love this room and the old lamp [the moon]. I do not want the other place.” (327, 強調原文通り)と大声で嘆く。盲目にさせるほどの日光に満ちた昼の世界は、Nycterisにとって大変異様で恐ろしいものであったため、彼女はそれを「死」だと見做すだけでなく、彼女の慣れ親しんだ夜の世界とは別の場所だと考えている。

日が昇るにつれて、盲目になり死の恐怖に怯える Nycteris とは対照的に、「昼の少年」 Photogen は強さを取り戻し、いつもの生命力に満ち溢れた存在になった。Nycteris から “Don’t leave me; … I am dying! I am dying! I cannot move. The light sucks all the strength out of me. And oh, I am *so* frightened!” (328, 強調原文通り) と懇願されたにも拘らず、彼は彼女の苦しみを理解しなかった／できなかったため、彼女をその場に残して去ってしまう。²³ Photogen はギリシャ神話の太陽神 Apollo のように日光の下力強く立つ姿が描写されるが、Nycteris は目が見えないため、“She fell down in utter darkness.” (328) という風に光の中にいるのに矛盾した表現がなされる。Nycteris にとって、彼女の周りの全ては “a flaming furnace” (328) のようであり、落胆し疲労困憊したまま、彼女は何か自身の住まいである墓へと這い戻ったのであった。

昼になり再び生溢れる存在となった Photogen ではあったが、彼は夜・闇への恐怖を感じたことにより、後に病気になってしまう。Watho は、彼女が生への権化となる様に心を砕いて育てた Photogen が力無く病に倒れたことを聞いて、彼女の実験が失敗したと悟り激怒する。彼女は Photogen を “a wretched failure” (330) と呼ぶだけでなく、彼女のこれまで愛情込めて育てていた少年に対する態度の急激な変化は “because he was *her* failure, she was annoyed with him, began to dislike him, grew to hate him” (330, 強調原文通り) と表現されている。そして、魔女は「昼の少年」を創り上げるのに失敗したと悟るやいなや、彼の片割れである「夜の少女」をもはや必要としなくなり、怒りを鎮めるために Nycteris を太陽の下に曝して殺そうとする (“She would set her in the sun, and see her die, like a jelly from the salt ocean cast out on a hot rock. It would be a sight to soothe her wolf-pain.” (332))。²⁴

「夜の少女」 Nycteris を殺すために、Watho は或る日の正午、男の家来 2 人に命じて熟睡している少女を日光の下草原へ置き去りにさせる。強烈な日光で目を覚ました Nycteris は、彼女を盲目にさせるほどの光と熱で苛む太陽を “the death-lamp” (333) と呼ぶ。ここでもまた、盲目と死が結び付けられているのは注目に値するだろう。母 Vesper 譲りの豊かな黒髪で、強烈な光から目を守るヴェールを作ったお陰で少し視力が戻った彼女は、側に咲く 1 輪の雛菊に気付く。夜の閉じた雛菊しか知らない Nycteris は、最初これが雛菊の目覚めた姿であり、“it was drinking life, with all the eagerness of life, from what she called the death-lamp” が認識できず、“Who then could have been so cruel to the lovely little creature [the daisy], as to force it open like that, and spread it heart-bare to the terrible death-lamp?” (333) と考える。しかしながら、夜・闇の恐怖に耐えきれずに逃げ、それを恐怖し憎むだけだった Photogen とは異なり、Nycteris は昼や日光、すなわち彼女にとっての「死」が自身にとって何を意味するのか考えようとする。彼女は思いを巡らし、目一杯開いた雛菊の姿は、より完璧な姿であり、より生命に満ちた姿なのだと悟る。

Nay, thinking about farther, she began to ask the question whether this, in which she now saw it, might not be *its more perfect condition*. For not only now did

the whole seem perfect, as indeed it did before, but every part showed *its own individual perfection* as well, which perfection made it capable of combining with the rest into *the higher perfection of a whole*. (333, 強調引用者)

その後、耐え難い熱や光の中、Nycterisは「死のランプ」を雛菊と結び付けて理解しようと努力する。彼女は、“The red chips [the cusps of the petal] looked as if the flower had some time or other been hurt: what if the lamp was making the best it could of her— opening her out somehow like the flower? She would bear it patiently, and see” (334) と、雛菊と同様に太陽が彼女に対しても最善を尽くしてゐるのではないかと考え、苦しみに耐えて真実を見よう・知ろうと決意する。Nycterisの昼の世界での経験—彼女の感じた苦しみや恐怖—は、私達皆が持っている・感じるであろう死への恐怖を示しているだろう。彼女は生と死を切り離そうとしたWathoのように死を避けるのでもなく、夜の恐怖に負けて逃げたPhotogenのように死を単に恐れるのでもない。彼女にとっての「死」を理解して歩み寄ろうとするNycterisの姿を通して、MacDonaldは人が抱く死への恐怖と共に、それにどう対処すべきかを描いているのである。

5. この世を“go out”した先の世界と“the blind mother”—誕生としての死、喜ばしき生 i) 昼と夜の統合—完全な生（この世）

第3節・4節にて、墓に閉じ込められて育てられたNycterisが“go out”して記した夜と昼の世界がそれぞれ「誕生（生）」と「死」に対応することを考察して来た。本節の第1部では、Nycterisが外界の夜と昼は1つの世界であると悟り、完全な生（この世）となる過程を見て行く。そして、彼女が物語の結末部で言及する「go outした先の世界」と、MacDonaldの信条である「死後に有るより豊かな生」との対応を示し、実際にその場所へ“go out”したVesperとNycterisの関係からより大きな視点で死生観を考える第2部に繋げたい。

体調が少し良くなったPhotogenはWathoの城から逃げ出し、Nycterisと庭園で再会する。自身も「死」を感じるほどの恐怖（＝闇・夜）に遭ったPhotogenは、彼女の太陽の下での苦しみを理解できるようになった。Nycterisが“I live under the pale lamp [the moon] and I die under the bright one [the sun]”と言うのを聞いた彼は、“Ah, yes! I understand now, … I would not have behaved as I did last time if I had understood; but I thought you were mocking me; and I am so made that I cannot help being frightened at the darkness. I beg your pardon for leaving you as I did, for, as I say, I did not understand. Now I believe you were really frightened.” (335) と述べ、彼女に許しを乞うと共に理解を示した。²⁵ その後、彼等はお互いの生い立ちや経験について話して、自分達が1つの世界の半分しか知らなかったことや、彼等の無知の原因が魔女Wathoの実験によるものだと悟る。そして、自身の対極に位置するもの—Photogenにとっては夜（闇）、Nycterisにとっては昼（太陽光）—への恐怖や苦しみを經た2人は互いを理解し助け合い、

Watho からできるだけ遠くへと逃げることを決意する。

夜の間は Nycteris が Photogen を恐怖から守り、昼になると目が見えず強烈な光と熱に苦しむ彼女を Photogen が代わりに保護して互いに助け合いながら、2人は Watho の城から逃げ出す。²⁶ 暫くして、Nycteris が予想通り太陽の光と熱に焼かれて死んだかどうか見ようと望遠鏡を覗き込んだ Watho は、2人が手を取り合って逃げ出そうとしているのを発見する。望遠鏡を通して Photogen と Nycteris を見る彼女の姿は、先行研究も指摘する通り、残忍な科学者の側面を彼女が持っていることや、彼等が魔女の実験・観察の対象であったことを表すだろう。²⁷ Watho は、支配下に置いていた2人が逃げ出したことに激怒し、何らかの魔法を使って狼に変身して彼等を追い掛ける。作品冒頭で、Watho は “she had a wolf in her mind. She cared for nothing in itself—only for knowing it.” (304, 強調引用者) と書かれており、「心の中の狼」は彼女の貪欲で残忍な知識欲の象徴だと考えられる。それは、自身の実験が失敗したことを悟って怒り狂った時に、彼女が Nycteris を強烈な太陽光の下に曝して死ぬ様を見るのは “It would be a sight to soothe her wolf-pain.” (332, 強調引用者) と考えていることにも表れているだろう。Watho は本来は残忍な存在では無く、この狼が彼女を残忍にしており、作品の初めて彼女が自身の中の狼を恐れる描写が “She was straight and strong, but now and then would fall bent together, shudder, and sit for a moment with her head turned over her shoulder, as if the wolf had got out of her mind on to her back.” (304, 強調引用者) となされていた。しかしながら、今、鎮められなかった “wolf-pain” が制御不能となり、怒りのままに彼女自身が貪欲で残忍な狼となってしまったのである。²⁸

Nycteris は太陽の強烈な光によって盲目になってはいたが、鋭い嗅覚で敵の接近を知り、Photogen に “I smell a wild beast—that way, the way the wind is coming” (339) と Photogen に警告する。彼女が予め警告してくれたお陰で Photogen は戦いの準備ができ、矢を放って巨大な狼を仕留めようとする。Watho は魔法で武装していたため、彼女に当たった最初の矢は V の字に折れ曲がり跳ね返されてしまったが、Photogen は2本目の矢を見事狼になった Watho の胸に命中させ仕留めることに成功する。魔法を打ち破ったこの2本目の矢について語り手は不思議なことに “The foolish witch had made herself invulnerable, as she supposed, but had forgotten that, to torment Photogen therewith, she had handled one of his arrows.” (339) と述べている。実は、この矢には Photogen の血が付着していたのであるが、これについては、彼が夜を見た恐怖により病気になってしまった時点で遡る必要が有る。Watho は、「生」の権化となるべき Photogen の弱々しい姿を見て自身の実験が失敗したことを悟り、激怒して彼に向かって “she hated him like a serpent” (331) と恐ろしい形相で述べる。そして彼の持ち物から矢を取り出して、動けない状態にいる彼の身体を矢羽でくすぐったり、矢じりで血が流れるほど深く刺したりしていたのである。語り手は “What she meant finally I cannot tell” (331) と述べているが、魔女の行動や様子に命の危険を感じた Photogen は、彼女の居城から逃げる決断を早めた。そして今 Watho は、Photogen に血を流させて死を意識させるほどの恐怖を与えた矢によっ

て、魔法による武装を解かれ“invulnerable”になり、彼女自身に死がもたらされたのであった。生命力の象徴である血の付着した矢によって亡き者にされた Watho の姿には、生と死を切り離す試みの不可能さ・彼女の試みの不毛さを物語るものと言えよう。無事に魔女 Watho を倒して恐れるものが無くなった「昼の少年」Photogen と「夜の少女」Nycteris は、その後結婚し、幸せに暮らした。

一般的に太陽や光は生命を連想させるので、Marshall が本作品で典型から外れて“the brightness of the sun is Nycteris's nemesis rather than her goal” (65) が描かれていることに疑問を感じているように、確かに太陽の光を「死」として表現するのは大変奇妙なことだと思えるかもしれない。しかしながら、本節でこれまで述べて来たように、Nycteris の昼の世界での経験—太陽の光から受けた苦痛や恐怖、そしてそれを理解しようとする姿勢—は、死への恐怖とそれを理解し歩み寄ろうとする試みを示しているのである。更に、Nycteris は Photogen と結婚してすぐに、昼と夜は異なる別の世界なのではなく、実はこの世の2つの面に過ぎないと理解する。Nycteris は彼女にとって「死」であった昼もまた生の世界であること、そして夜よりも昼の方が生命が生き活きとしたものだと悟るに至る。また、昼と夜の合一の重要性は、母親の目が子供達の目に交換して受け継がれていたという不思議な事実にも如実に表されているだろう。Photogen の目は“as black as Vesper's” (306) と表現され、物語最後で Nycteris に会った Aurora は自分の義理の娘となった少女の目が自分と同じ“azure eyes shining through night and its clouds” (340) であることに驚いている。Watho の実験のために愛する我が子を奪われた母達の無言の抵抗とも言える、子供達における目の交換は、昼と夜、そして生と死を切り離すことは不可能であることを指し示すだろう。そして、Photogen と Nycteris の結婚は、二分されていた昼と夜の合一を象徴し、完全な生の世界となったのである。

物語結末部で Nycteris は Photogen に“*But who knows,...* that, when we go out, we shall not go into *a day as much greater than your day* as your day is greater than my night?” (341, 強調引用者) と述べているが、彼女が言及したこの“much greater day”は、MacDonald の信条である「死後に有るより豊かな生」として解釈できよう。真の「誕生」をして生の素晴らしさを感じる夜の世界と「死」とも言える太陽の下での壮絶な経験、そしてそれらが実は1つの世界であり、昼の方がより生命が生き活きしたのだと悟ったことにより、彼女はこの考えを抱くに至ったのである。死とは、限られた生を生きる人間にとって最も恐ろしいものであるに違わず、私達は Nycteris の無垢な目を通して昼の世界を見ることによって、その「死」を擬似的に経験することができる。確かに、死とは恐怖の対象であるが、Nycteris が昼と夜を切り離せない1つの世界の両側面だと理解したことは、生と死が一続きのものであることを示唆する。私達は、死を理解しそれに歩み寄ろうとしなければならないのであり、Watho のようにそれを生から切り離すべきではないのだ。更に、Nycteris は、昼の世界が夜よりも生き活きとして素晴らしいものだと見做すことにより、死後により良い生が有ると示している。Nycteris の姿は、私達は死への恐怖に支配されて弱々しく生きる必要は無く、生は続いて行くのだ、ということ力を強

く見せてくれる。

ii) go outした先の世界と the blind mother—誕生としての死、喜ばしき生

本節の第2部では、夜と昼を切り離す構造を作っていた魔女 Watho が最後倒され、Photogen と Nycteris の結婚が象徴するように2つの世界の融和がなされていることに加えて、昼と夜は1つの生の世界なのだ理解した Nycteris がこの世界を“go out”した先の世界に思いを馳せる姿で物語が終わっていることに注目し、昼と夜を1つの「この世界」として考えた時に立ち現れる作者の死生観を考察する。ここで重要となるのは、Nycteris の母—盲目であると共に作品上「見えない」という二重の意味で“blind”である彼女の母 Vesper の存在である。19・20世紀の女性作家の作品を分析した Marianne Hirsh は、19世紀の作品における母娘の絆の不在を指摘しており、“The History of Photogen and Nycteris”における母 Vesper の出産時の死による不在もその伝統に連なるものと言えるだろう。実際、MacDonald は他の作品においても、ヒロインの母が早期に亡くなっているという設定にしている。²⁹ Hirsh は、家父長制社会において娘が「女」になるには、母娘の絆は断ち切れねばならず、母親の不在や沈黙はヒロインの成長や物語の基盤に強固に結び付くものだと述べている。³⁰ しかしながら、本作品においては、MacDonald は母親を単に不在にしたのではなく、一見見えない (blind) ようではあるが母 Vesper と Nycteris には実は密接な関係が描かれているのである。よって、第2部ではこの母娘の見えない関係性を可視化するために、Nycteris の外の世界での経験を、この世界を“go out”してもはや見えなくなってしまった盲目の母 Vesper の代弁だと見做す。更に、母娘共通して“go out”する様が「誕生」として描かれていることに着目し、2人の再会の可能性にも言及する。そうすることにより、より大きな視点で作品中に表された死生観、そして女性像を読み解く。

まず、「盲目」や「見る」ということに着目して、母 Vesper と娘 Nycteris の見えない (blind) 関係性を見えるようにして、彼女達の強固な結び付きや、Nycteris による外の世界の記述が Vesper の代弁だと言えることを考察したい。「盲目」とはしばしばネガティブなメタファーとして用いられることがあり、不信仰な者達が盲目にさせられることや、救世主の4つの使命の内の1つが人々に目の光(視力)を回復させることであり、イエス＝キリストが盲目を癒すことから分かるように、キリスト教では盲目はしばしば不信心と結び付く。³¹ しかしながら、MacDonald は目が見えないことを必ずしも不信仰と結び付けて書いている訳ではなく、³² 本作品においては、Vesper が夫の死以来盲目になったことや、彼女の“she always looked as if she wanted to lie down and not rise again.” (305) といった悲しみにくれ死に向かう様子から分かる通り、盲目は「死」のメタファーとして描かれている。更に、注目すべきことにこれは母娘両方において当てはまる。Nycteris が、太陽の光の下で盲目になったことは、第4節で述べた通りである。彼女にとって、最初照り付ける太陽の光に満ちた昼の世界は正に「死」であったため、強烈な熱と光に苦しみ、盲目となって恐怖に怯える彼女の姿は、Vesper と同様に、死と盲目が同等のものとされ

ていることを示す。Nycteris は、初めて日の出を見た時に“it was coming death!”と表現した後、“She must be blind soon! Would she be blind or dead first?” (327) と自問して盲目と死を結び付けている。この最初の昼の世界での経験の際も、後に彼女を亡き者にしたい Watho の命で白日の下に曝された際にも、Nycteris が目が見えない状態であることが繰り返し述べられていることは注目に値しよう (332, 334-35, 338-39)。このように、本作品では、母娘の盲目となった描写が、死と密接に結び付けられているのである。

Nycteris が盲目の母の代わりに世界を「見て」記述をしていることを示すため、先に母娘の経験の対応関係を示しておこう。Nycteris は外界のことを何も知らなかったため、偏見のない無垢な目を持っていたことはこれまで何度も述べて来た通りである。³³ 第3節・第4節にてそれぞれ Nycteris の外界の夜と昼での初めての経験を、私達生きている人間に記述し得ない「誕生 (の瞬間)」と「死」を表すものとして考察したが (表3)、第5節1部で論じたように昼と夜の世界は最後統合されるため、これらは Nycteris にとって1つの「未知の世界」であったと見做すこともできる。MacDonald は Nycteris の無垢な目を通すことで、新鮮な驚きを持って世界を見せている。そして、表4に示すように、Nycteris が“go out”した先に有った、彼女にとって未知の世界 (夜と昼) は、Vesper がこの世を“go out”した先で見たであろう未知の死後の世界と対応させることが可能なのである。

表3 < Nycteris の経験だけで見た場合 (昼と夜統合前) >

	誕生日前	誕生の瞬間・生	死
Nycteris	地下墓地の部屋	“go out”した先の夜	“go out”した先の昼

表4 < Nycteris と the blind mother Vesper の関係で見た場合 (昼と夜統合後) >

	この世 (知っている世界) = 生	“go out”した先の世界 (未知の世界) = 死・死後
Vesper	我々が住んでいるこの世界	この世界を“go out”した先の死後の世界
Nycteris	産まれた時から閉じ込められて育った地下墓地	地下墓地を“go out”して見た外の世界の昼と夜

次に、Nycteris の唯一知る世界である閉じ込められていた地下墓地から“go out”して外界を記述する様が、亡くなってしまっただけに作品から見えなくなってしまった盲目の母 Vesper の代弁であることを明らかにするために、Nycteris が「見る」主体として描かれていることを考察する。Nycteris は産まれた時から薄暗いランプの光以外に明かりを与えられなかったため、僅かな光で物を見ることが出来る。Watho は、Nycteris には読み書きを含め教育は不要だと考えていたことに加え、ランプの薄暗い光では、文字を読むことができないと思っていたが、後に Nycteris は Watho の侍女 Falca を説得して文字を教えてもらい、彼女が度々持って来てくれた子供用の本を僅かな光の下で読んで学んでいる。

また、夜に外で Photogen と初めて会った時には、彼が真っ暗で何も見えないと怖がるのに対し、Nycteris は小さな花々や葉の一枚一枚を数えられる様子が描かれており (323-24)、彼女の視力の良さが強調されている。彼女の目は “the eyes made for seeing” であり、“what many men are too wise to see” (313) を見ることのできる、正に「見るための目」なのである。よって、母が記述し得ないことを娘が代わりに示していることを、視覚の対照によって現していると解釈できよう。更に、Nycteris は、Photogen の漆黒の瞳を見た際に、“You can’t see with them because they are so black. Darkness can’t see, of course.” (323) と述べている。Nycteris が Photogen の母 Aurora の碧眼を受け継いでいたことと同様に、Photogen が Vesper の漆黒の瞳を持っていたこと、その目を見た Nycteris が盲目と結び付けていることは注目すべきだろう。そして、Nycteris は闇の中何も見えない Photogen に対して、“*I will be your eyes, and teach you to see.*” (323, 強調引用者) と言っている。Vesper の目を持つ Photogen が彼にとっての「死」の世界で目が見えない状態でいた時、Nycteris は彼の目になっていた。従って、同様に、彼女は既に死んでしまった盲目の母 Vesper の目となっていると考えられるのである。

Nycteris が、二重の意味で「見えない (blind)」母の代わりに世界を記述していることを示すため、彼女達が未知の世界へ “go out” する様子における共通点：「盲目」と「誕生」イメージが描かれていることに着目する。Vesper は、夫が亡くなって以降目が見えなくなっていたため、呼び寄せられた Watho の居城で地下墓地に住まわされていることも知らなかった。そして、Nycteris を出産すると同時に死んだ (go out) 時も盲目のままであった。対照的に、Nycteris は「見る」主体として描かれているが、注目すべきことに、初めて地下墓地から “go out” する直前には、彼女もまた盲目になっているのである。地震が起きて、部屋唯一の明かりが消えた時の Nycteris の様子は “she felt as if both her eyes were hard shut and both her hands over them” (310) と描かれているため、自身の知る世界から初めて go out する時には、母娘共に目が見えない状態であった。更に、彼女達の “go out” する様子は共通して「誕生」として表現される。地下墓地の狭い部屋しか知らなかった Nycteris が、初めて外の世界へ “go out” した時の様子が生に溢れた正に彼女の真の「誕生」であるのは、第3節の2部で考察した通りである。Vesper の場合は、簡潔にはあるが、“And just as she [Nycteris] was born for the first time, *Vesper was born for the second, and passed into a world as unknown to her as this was to her child*—who would have to be born yet again before she could see her mother.” (307, 強調引用者) という風に、死んで (go out) 未知の世界へ行ったことが「誕生」イメージを以て表現されている。更にここで注目すべきは、Vesper が行ってしまった世界が「彼女の子供にとってのこの世界と同じ位未知の世界」と表現されていることである。すなわち、Vesper にとっての死後の世界と Nycteris にとってのこの世が、同等の「未知の世界」として並置されているため、“go out” した Nycteris のこの世界での経験を Vesper の代弁だとする解釈が可能となるのである。

これまで、Nycteris の経験が Vesper の代弁だと示すことにより、見えない母娘の関係

を可視化して来たが、最後に“go out”する様が「誕生」として表現されていることをより詳しく考察して、the blind mother と Nycteris の結び付きを見てみたい。前段落で引用した、Vesper の「誕生」イメージを以て描かれた出産時の死の場面と、Nycteris が物語最後に言及する “But who knows, … that when we go out, we shall not go into a day as much greater than your day as your day is greater than my night?” (341) を読み合わせると、Nycteris と Vesper の再会の可能性が示唆されていることが浮き彫りになる。Vesper の死が彼女の「2 回目の誕生 (“Vesper was born for the second” (307))」と表現されていること、そして Nycteris が最初に地下墓地から “go out” した様子が、第 3 節で論じたように彼女の真の誕生として見做せることを考えるならば、最後に言及される “go out” は Nycteris の 2 回目の誕生となる。ここで、Nycteris が、Vesper の出産・死の場面で “her child—who would have to be born yet again before she could see her mother.” (307) と言われていたことに注目したい。すなわち、Nycteris はこの世界（昼と夜を統合したこの世）から “go out” した先の世界で母 Vesper と再会できることが示されているのである。しかも、Vesper は Nycteris を産むと同時に亡くなっているため、この世界で彼女達は一緒にいたことが無く、より正確に言うなら、この世界を “go out” した先で初めて会うことになる。作品上ははっきりと描かれていない或る意味 “blind” なこの母娘の繋がりを見ようとするならば、死が正に「誕生」として描かれていることを読みとることができるのである。

Vesper が悲しみの内に孤独の中死んでしまった様子や、出産時の母の死により断絶された親子の絆、そして彼女達の関係性が作品上明白には描かれないことにより、この母娘の繋がりは断絶され、孤独で寂しいもののように思われる。物語の最後で Photogen は宮廷の要人となっていた両親と再会を果たすのに対し、読者が Nycteris の両親は既に他界していると知っている通り、彼女の両親については誰も何も知らないことも、彼女達に纏い付く「死」の雰囲気や、関係性の軽視を強調しているように思われる。一見、この結末部の対照的な描き方には疑問が残るが、実はそうではない。Nycteris が最後に述べた「私達が go out した先にあるより素晴らしい世界」とは、本節の第 1 部で述べたように、MacDonald の信条である「死後にあるより豊かな生」として読めるが、これを Vesper との関係性で読むと、それが更に鮮やかに見えて来るのである。この世界を “go out” した先に母 Vesper との再会、より正確に言えば最初の出会い、すなわち正に「誕生」の場面が用意されており、断絶されたかに見えたこの母娘にも救いが与えられている。「死とは恐ろしいものではなく、その先に更に豊かな生が有る」という MacDonald の死生観が、作品上でははっきり見ることのできない盲目の母と「見る」主体である娘の “blind” な結び付きを可視化したことにより、実に温かなものとして受け取ることができるのである。³⁴

6. 結論

本稿は、「夜の少女」Nycteris が「昼の少年」Photogen と単純な二項対立の存在ではないという先行研究における盲点に目を向け、Nycteris が自分の育った地下墓地から “go

out”してその無垢な目を通して外の世界を知り記述して行く過程を考察することで、作品に表れた作者の死生観や女性像を浮き彫りにした。まず、第2節にて魔女 Watho の実験が、死と生を切り離す行為だと解釈できることを考察し、第3・4節にて魔女の意図と墓から“go out”した Nycteris の昼と夜の経験との間のずれに言及しながら、MacDonald の死生観を明らかにした。Nycteris の外界の夜での初めての経験は、私達に擬似的に「誕生」を体験させるものであり、産まれる・生きることとは“a mighty bliss” (314) だと示すものである。そして彼女の「死」への恐怖や苦しみを感ずる昼の世界での経験は、私達は死を理解し歩み寄りながら、その恐怖に負けることなく強く生きねばならないことや、死後にも生命は続いて行くのだと伝えてくれる。³⁵ 第5節では、昼と夜を1つの「この世界」だと捉え、地下の墓から“go out”した Nycteris が未知の「この世界」を記述することを、本当の意味でこの世界から未知なる死後の世界へと“go out”した盲目で作品上見えない二重の意味で“blind”な母 Vesper の代弁だと解釈し、それにより見えて来る対比構造が作者の死生観を反映していることを読み解いた。更に、この世界から“go out”した先で Nycteris と Vesper の再会、より正確に言えば初めての出会いができると示唆されていることを指摘して、一見見えない彼女達の“blind”な関係性を見ることで、死後の世界へ“go out”することが正に「誕生」イメージで描かれていることや、それが母娘の出会いをもたらすような温かなものとして受け取れることを浮き彫りにした。“The History of Photogen and Nycteris”は、Nycteris の無垢な目を通して世界を見ようとすることで、そして彼女と盲目の母の「見えない」繋がりを見ようとする中で、見過ごされて来た作者 MacDonald の死生観や女性像が鮮やかに立ち現れて来るのである。

注

1. 本作品は、版によって“The History of Photogen and Nycteris”と“The Day Boy and the Night Girl”の2つのタイトルが用いられている。本稿では、先行研究も言及することが多く、本稿が典拠とする U. K. Knoepfmacher 編集の短編集 *The Complete Fairy Tales* で用いられているタイトル“The History of Photogen and Nycteris”に表記を統一させる。
2. MacDonald 作品を論じる際、しばしば先行研究は相反する2つのもの—キリスト教／異教や精神（魂）／身体、男性／女性、現実／異世界・夢等—に着目して来た。特に、Stephen Pricket は、MacDonald が多くの著作の中で2つの世界を創り上げ、それらの融和の重要性を示していると指摘する。本作品では、副題の“A Day and Night Märchen” 或いは別のタイトル“The Day Boy and the Night Girl” が示す通り、昼／夜や少年／少女という明らかな反対物が現れるため、多くの先行研究がそれらに着目して来た。例えば、Björn Sundmark は“one of the themes of this story surely is that dualities must be embraced, and that synthesis can only be attained through the productive clash of thesis and antithesis.” (13) と述べている。また、Cynthia Marshall は、“the narrative point of the story is the necessary *joining* of Photogen’s daylight realm with Nycteris’s moonlight one.” (65-66, 強調原文通り) と述べて、本作品における反対物の融和の重要性を指摘している。確かに、物語の最後で昼と夜は統合されるため、これらの先行研究が指摘する通り、相反する2つのものの融和は本作品において鍵を握るテーマである。しかしながら、「昼の少年」Photogen と「夜の少女」Nycteris が完全に同等の反対物ではないことは見過ごせない事実であり、この事実は本稿が主眼を置くものの1つである。
3. 以下、本稿の引用は、U. K. Knoepfmacher 編集の *The Complete Fairy Tales* によるものとし、丸括弧内にページ数を記す。
4. 他、脇 133 や、安藤 60 を参照のこと。
5. 「死後の生」を信じるのはキリスト教的な考えだと言えるが、MacDonald の場合は、キリスト教の他に、彼の死生観を形成した重要なファクターが有る。それは、ドイツロマン派の詩人・小説家 Novalis (1772-1801) の影響である。Novalis は、死とは“at the same time an end and a beginning”であり、“Perfect life is heaven… What we here call death is a consequence of absolute life, of heaven… Hence the perpetual destruction of all imperfect life… Everything must become heaven” (Wolff 22) と考えていた。MacDonald は、Novalis の著作に学生時代に会って深い感銘を受けており、Raepel は“MacDonald found a glorious liberation in the thought that death was merely a higher form of life and that the soul, shuffling off the fetters of the body, would rise free and unbounded to bliss” (107) と指摘している。
6. MacDonald が誕生や生まれる前に高い関心を持っていたことを示す他の例としては、*Phantastes* (1858) の第12章に挿話として登場する遠い星の人々や、*At the Back of*

the North Wind (1871) で主人公の少年 Diamond の見た夢の天使達が、地上の人間の誕生前の姿だと示唆されていることが挙げられる。加えて、*Lilith* (1895) においては、或る子供の誕生が悪魔的な性質を持つ女王 Lilith に死をもたらすという古い予言が作品の鍵を握っていることや、娘 Lona を産んだことが Lilith の救いに繋がると元夫 Adam が述べていることから、MacDonald が「誕生」を重要なモチーフとして作品に描き込んでいることが窺われる。*Lilith* における誕生や生と女性像については、拙論『「リリース」さえも出産によって救われるだろう』—ジョージ・マクドナルドの「リリース」における生命の輪の継承と新生の可能性」を参照のこと。

7. “blind” という語には、「目の見えない、盲目の」の他に “invisible” や “unseen” と同じ「目に見えない」という意味が有るため、本稿のタイトルに使用されている “the blind mother” には、Vesper が「盲目の」母であったことに加え、Nycteris を産んだ時に亡くなって以降作品に登場しない「見えない」母であるという意味を込めている。本稿は、盲目の母の代わりに Nycteris がその無垢な目で世界を「見る」こと、そして一見「見えない」母の存在や「見えない」母娘の繋がりを見ようとするにより、本作品における作者 MacDonald の女性像や死生観を浮き彫りにするものである。
8. 曙の女神 Aurora (Eos) については、『世界女神大事典』293-94 を参照。
9. Hesperides は「黄昏の娘達」という意味である。黄昏のニンフ Hesperides については、『世界女神大事典』321 を参照。
10. “nycti-” は「夜の」という意味の接頭語であるが、接尾語 “-nycteris” は「コウモリ」という意味である。作品中で一度 Nycteris は “the little bat” (307) と言及されているので、MacDonald は彼女の名前を付ける際に「コウモリ」という意味も念頭に置いていたと思われる。いずれにせよ、コウモリも夜を連想させる動物であり、「夜の少女」に相応しいと言えよう。
11. Fernando Soto が “His allusions to Greek myths and religion range from superficial references to full-blown creative reinterpretations of some obscure, ancient stories.” (65) と指摘する通り、MacDonald はギリシャの神話や宗教に大変高い関心を持っていたため、“The History of Photogen and Nycteris” における登場人物の名前の由来をギリシャ神話の女神に求めるのは妥当だと言えよう。Knoepflmacher は、Nycteris はギリシャ神話の不和の女神 Eris の名を含むことから “night’s unrest” (354) という別の可能性を指摘しているが、表2で触れた通り夜の女神 Nyx も彼女の名前の由来として重要だと考えられる。Eris については、『世界女神大事典』295 を、Nyx については同書 314 を参照。
12. 後に Nycteris は侍女 Falca を説得して文字を教えてもらい、Falca は幾つか子供向けの本を彼女に与えた。そして本を読むことで、Nycteris は外界のことを少しずつ知識を得るようになる。ここで、Watho が Nycteris に読み書きを教えず、書物を与えなかったのは、19世紀における女子教育の問題との関連も指摘できよう。当時の少女は、少年よりも教育の機会が遥かに少なかったのである。当時の女子教育につい

- ては、香川 129-31, 135-38 を参照。MacDonald はフェミニストと交流が有り、女子大学 Bedford College で教鞭を取ったり、異母姉妹 Louie を励まして Bedford College に進学させたりしていたため、彼が女子教育に高い関心を持っていたことが窺われる。そのため、少女を部屋の中に閉じ込めて教育を施さない Watho の姿を通して、少女の教育の機会が奪われていること・少ないことに異議を唱えていると推察される。
13. Watho は運動するための道具を Nycteris に与えており (“gymnastics things” (311))、身体を動かす機会は持たせていた。しかしながら、これはあくまで少女を狭い空間に留めておくためのものであったと思われる。Watho が Nycteris と直接接触し合う場面が描かれないことから分かる通り、彼女は Photogen の身体や成長に多大なる関心を向けるのと対照的に、少女についてはほぼ注意を払わないのである。
 14. Marija Gimbutas は、“the tomb is a womb” という新石器時代の信条について言及している。彼女は、古代ヨーロッパの新石器時代の墓は卵型や子宮の形をしており、死者の身体には血や生命、新生を表す赤色の土が振りかけてあったと述べる。Gimbutas 281 を参照。古代の人々は、墓に横たわることを、新生のために子宮に返ることだと見做していたと思われる。本当の意味では産まれていない状態のままであった Nycteris は、この “the womb/tomb” にいるのであり、真の誕生の時を待っているのである。
 15. Dearborn は、Nycteris の監禁状態は、当時女性性や想像力が抑圧され軽視されていたことを示唆すると指摘する。Dearborn は “[Nycteris] is placed in constant darkness from her infancy, which says something about the Victorian approach to women and to the imagination itself.” (29) と述べた上で、Nycteris が外へ出る過程や彼女の持つ美德を描くことにより、“MacDonald is urging us to rethink femininity and that which is associate with it—the night and the imaginative.” (30) と主張する。確かに、Dearborn の論は一理有るが、本稿は寧ろ Nycteris の監禁を誕生前の状態、即ち子宮に留まっている状態だと解釈する。
 16. MacDonald は、他の作品でも何かを奪われた少女を描いている。例えば、“The Light Princess” (1864) では、主人公の姫は、洗礼式の日には彼女の叔母で魔女である Makemnoit の呪いにより、身体的な重さと精神的な重々しさの両方を奪われ、二重の意味で “the light princess” となってしまう。また、*At the Back of the North Wind* (1871) 中の挿話 “Little Daylight” では、邪悪な妖精の呪いにより、日中眠り続けるようにされ、Nycteris と同様に日光を奪われた Princess Daylight が登場する。これらの作品では、彼女達がいかに奪われていたものを獲得するかが鍵を握っているため、本作品でもそれに着目する必要が有る。
 17. Nycteris の部屋に吊るされた、この美しく喜びを与えるランプは、彼女の成長の障害物だとも見做すことができる。これと似たものとしては、*Phantastes* (1858) で主人公の青年 Anodos が Chapter 9, 22 で出会う乙女の持っていた珠 (the globe) が挙げられる。美しい光と音を発するこの珠を、乙女は宝物のように大切にしてい

たが、それは彼女の成長のために割られる必要があった。同様に、Nycteris のランプも彼女の成長、そして真の誕生の為に壊されなければならなかったのである。*Phantastes* の珠を持った乙女の成長については、拙論「珠を持った乙女の成長—George MacDonald の *Phantastes* における女性像と死生観」を参照。

18. 先行研究は MacDonald が作品中にいかにか死への考えを描いているかに着目する傾向にあった。しかしながら、彼が誕生について深い関心を持っていたことは見逃せない事実である。序論で述べた通り、MacDonald は“A Sketch of Individual Development” (1880) の冒頭で、誕生の瞬間やそれ以前について知りたい欲求を表している。他、MacDonald は *Phantastes* (1858) の第 12 章で登場する遠い星の人々や、*At the Back of the North Wind* (1871) で Diamond の夢に現れた天使を、人間の誕生前の姿として描いている。また、彼の晩年の傑作とされる *Lilith* (1895) では、或る子供の誕生が、悪魔的で神秘的な女性 Lilith に死をもたらすという予言が有り、作品の鍵を握ることになる。これらのエピソードは、MacDonald の誕生への深い関心を示すものであり、本作品においては Nycteris の外界での最初の経験を「誕生」として描き、彼の関心を追求したのだと考えられる。
19. MacDonald は本作品にて風を女性として表現したことに加えて、*At the Back of the North Wind* (1871) において、美しく魅力的な女性の姿で登場したり、文字通りの北風として登場したりする不思議な女性 North Wind を描いている。一般的に、風神や風の権化は男性として表現されるため、MacDonald が、自身の作品の中で風を女性として擬人化しているのは注目すべきである。最も有名な風の神は、ギリシャ神話の北風の神 Boreas であろう。加えて、ギリシャ神話には Boreas の他に南風 Notus、西風 Zephyrus、そして Poseidon の息子である風の神 Aiolos といった 3 人の男性の風神がいる。日本神話においても、風神は男性であり、風の入った大きな袋を肩に担いだ裸の男性として表現される。同様に、仏教の風の神である風天もまた男性であり、白い髪と赤い肌を持ち武装した姿でしばしば描かれる。神話以外では、MacDonald を含めた同時代の作家に影響を与えていた John Ruskin (1819-1900) が *The King of the Golden River* (1841) において、破壊的で報復的な力を備えた男性の風の権化 South-West Wind, Esquire を登場させている。以上の例から分かる通り、風の具現化や風神は概して男性として描かれており、「男性」の特質とされる破壊性や力が強調されている。そのため、MacDonald が「女性の息」という優しいイメージで風を描いたり、女性として具現化しているのは、ジェンダーの観点からも重要なのである。
20. “I-Thou relationship” や “I-it relationship” という用語は、オーストリア生まれのユダヤ人哲学者 Martin Buber (1878-1965) によるものである。Nycteris と Watho の自然に対する関係は、それぞれ “I-Thou”、“I-it” だと考えられる。更には、Watho は Photogen と Nycteris、そして彼等の母親達をも、人では無く実験に使う道具 (もの) として見ているため、“I-it relationship” である。Dearborn もまた、Watho を “encased in ‘I-it’ relationships… —in which one treats everyone else as a means to an end, an

- object for one's use or discarding" (33) と表現している。
21. Sundmark は “her [Nycteris] nightly predicament has not ‘benighted her,’ rather it has sharpened her perceptions beyond the ordinary. She can appreciate nature in ways that people normally do not do… Nycteris would not have made this existential realization, without Watho’s experiment” (13) と述べ、本稿と同様に、Watho の実験のお陰で Nycteris はこの稀有な経験をすることができたのだと指摘している。
 22. 昼しか知らないため、Photogen が初めて夜を見た時感じた圧倒的な恐怖は、彼にとって正に「死」のようなものであったため、本稿において Photogen の経験も考察すべきだという指摘が有るかもしれない。しかしながら、本稿の鍵となるのは、①先行研究で見過ごされていた Nycteris が二重に無知な状態であったこと② Watho の実験の意図（昼＝生／夜＝死）と Nycteris の外界での経験（昼＝死／夜＝真の誕生・生）のずれである。Photogen の経験は、昼＝生／夜＝死とする Watho の実験における二分に一致しており、彼が夜・闇を「死」のように恐怖する様子は、Watho の意図を示すものであるということ以上のものではないのである。
 23. Jarrar は、“MacDonald’s fairy tales and fairy-tale novels question Victorian middle-class norms of gender and sexuality” (42) と述べ、本作品において “MacDonald questions the arrogance of the male characters and sides with female characters. He depicts the latter as persuasive, humble, and brave and the former as unconvincing, arrogant, and cowardly.” (45) と指摘している。MacDonald は、Jarrar が男性キャラクターのものと見做す “unconvincing, arrogant, and cowardly” という特徴を備えた少女も他作品で描いているため（例えば、“Cross Purposes” (1867) の Alice や *The Wise Woman, or The Lost Princess* (1874) の Rosamond 姫と Agnes 等)、Jarrar の指摘を一般化するべきではないが、Jarrar の言う通り MacDonald は作品中で当時のジェンダー規範に疑問を投げ掛けており、庭園での Photogen と Nycteris のやり取りは、それを明確に表すエピソードだと言えよう。
 24. Watho は昼やその象徴である太陽光を「生」と見做していたため、彼女が Nycteris を太陽の下に曝して殺そうとしたのには矛盾があるとの指摘が有るかもしれない。しかしながら、Watho は Nycteris を夜・死の権化となるように育てていたため、彼女は太陽光（「生」）が少女に反対の効果、すなわち「死」を与えると考え、白日の下に曝して殺そうとしたのだと思われる。
 25. 自身も同じような恐怖を感じるまで、相手の恐怖に思い至れなかった Photogen とは対照的に、Nycteris は彼女にとって居心地が良い夜・闇を「死」のように恐れ慄く Photogen を理解できないながらも思い遣りを示す。頭で理解できて初めて相手の感情に思いを馳せられた Photogen と、頭で理解できずとも共感を示した Nycteris の姿からは、男性／女性＝理性／感情というジェンダー観の表れとして見ることもできよう。更に、ここでは、MacDonald 作品でしばしば描かれる想像力の重要性が、

Nycteris を通して描かれている。彼女の想像力は、雛菊を見て「死」のような太陽が彼女にとって真に意味するものは何か思いを巡らす様子にも表されている。

26. MacDonald は、他の作品でも補い合って助け合う男女の姿を描いている。例えば、“The Golden Key” (1867) の Mossy と Tangle や “Cross Purposes” (1867) の Richard と Alice、*Princess* 二部作 (*The Princess and the Goblin* (1872) と *The Princess and Curdie* (1883)) に登場する Curdie と Irene 姫が挙げられる。MacDonald 作品において相互関係や相補性は重要なテーマの 1 つであり、“The History of Photogen and Nycteris” (1879) はこのテーマの極致だと言えよう。
27. MacDonald は、“The Imagination: Its Functions and Its Culture” (1867) において “to regard science as the sole interpreter of nature, or the laws of science as the only region of discovery” (1) に異を唱えており、想像力の重要性や、それと対比した科学の不毛さについて述べている。
28. Watho を “an experimental scientist” と見做す Gaarden も、“MacDonald elsewhere characterizes the ‘wolf in the mind as a ‘maniac thirst for knowledge’” (182) と述べている。しかしながら、MacDonald が狼を単純に「貪欲な知識欲」の象徴として描いていると一般化することができないのは、一言指摘しておく必要が有るだろう。なぜなら MacDonald は、“The Gray Wolf” (1871) という短編で、人狼の血筋に生まれ付いた若い女性を描いており、彼女の感じる抑えられない飢えは知識欲の表れとしては描いていないからである。イギリスの狼女物語を編集したウェルズ恵子は、ほとんどがヴィクトリア朝に書かれていることに触れ、この時期に「女性は男性に劣り男性に服従して生きるべきだという常識に女性が強い違和感を抱き、それを発言し始めた」(201) と指摘すると共に、狼女の魅力は「沈黙を強いられたセクシュアリティが復讐をかけるから」(204) だと述べている。本稿では、Watho の狼を知識欲と結び付けて論じたが、裕福だが孤独な孤高の女性である彼女の心の中に巣くう狼は、当時の有産階級の女性、或いは未婚の女性が強いられていた鬱屈した感情の象徴という側面も否定できない。従って、MacDonald 作品における狼は知識欲と共に、当時の女性の状況と照らして考える必要も有るのだ。
29. 例えば、*Princess* 二部作の Irene 姫や、“The Golden Key” (1867) の Tangle、“The Cruel Painter” (1864) の Lilith といった少女達の母親の早期の死が挙げられる。
30. Hirsh 43-67 参照。
31. ルルカー『聖書象徴事典』の「盲目」の項を参照のこと (369-71)。
32. MacDonald は、甘やかされて育ったためにわがままで癩癪持ちの Rosamond 姫が登場する *The Wise Woman, or the Lost Princess* (1874) の結末部で、彼女の両親である王と王妃を罰として盲目にしている。王と王妃は、the Wise Woman の下で成長して帰って来た Rosamond 姫がみすばらしい衣服を着ていたために、娘だと気付けないうろたえが描かれている (300)。MacDonald は、表層に捉われずに中身・真実を見抜けるかどうかということを複数の作品で表しており (例えば、*Phanastastes* (1858) で

Anodosが外見に惑わされてファミファタル的な the Alder Maiden を彼の追い求める the Marble Lady と間違えて危うく殺されかけたエピソード等)、*The Wise Woman, or the Lost Princess* での王と王妃の様子は、見た目に左右されて中身を見ることのできない彼等の「精神的盲目」を表現している。The Wise Woman は彼等を盲目にする前に “That you did not know her [Princess Rosamond] when she came to you is a small wonder, for you have been *blind in soul* all your lives: now be *blind in body* until your better eyes are unsealed.” (301, 強調引用者) と言って、彼等の精神的な盲目を身体に表して罰している。また、MacDonald は「盲目」に必ずしもネガティブな意味合いを持たせている訳ではない。“The Carasoyn” (1871) において主人公 Colin が助言を求める不思議な老婆は、目が有るべき所には皺が有るだけであり (216)、盲目である様子が描かれている。彼女は、*Phantastes* (1858) で Anodos を癒し助言を与える小屋に住む若い目を持つ老賢女や、*The Wise Woman, or the Lost Princess* で2人の少女を教育する the Wise Woman、*Princess* 二部作で主人公達を教え導く不思議な魔力を持った大祖母に連なる善良な賢い女性である。彼女の「盲目」は、常人には見えない未来や真実を見抜けるといふ、千里眼や知恵と結び付くものだと考えられる。“The History of Photogen and Nycteris” で MacDonald が「盲目」を「死」と結び付けているのと同様に、これらの例は、彼が「盲目」をキリスト教的な不信心の象徴としているのではないこと、更にはそれをネガティブ・ポジティブ両方の意味を持たせて描いていることを表す。

33. 脇明子も本稿と同様に、Nycteris の視点の重要性を指摘している。脇は、当時の社会は、産業革命によってそれまでの階級社会がぐらつき、宗教の権威も地に落ちており、それらに取って代わる新しい価値観を築き上げて行くことが強く求められていた時代だったと述べた上で、「従来の価値観に縛られないまっさらな視点」(178)を探していた作家達が少女の目を借りることにしたのだと述べる。彼女は、「…少女というのは、およそ無力で取るに足りない存在だったはずですが。しかし、それだからこそ、それまでの縛りが緩んで、物語のなかだけででも自由に行動させることが可能になったら、既成概念に縛られずに動くことで、作家を新しい道へと導いてくれたのではないのでしょうか」(178)と指摘し、「まっさらな視点」を持つ極致のような存在として本作品の Nycteris を挙げている (179-80)。本稿は、Nycteris の何も知らない「無垢な目」を通して見ることのできる、記述し得ない「誕生」の瞬間や「死」について論じているが、脇の言う、当時の作品における少女達をもたらす「従来の価値観に縛られない視点」という点から、MacDonald が少女の視点で世界を描いた重要性にも触れる必要が有るだろう。
34. *At the Back of the North Wind* (1871) では、主人公の少年 Diamond は、死後の世界とされる北風の後ろに有る国へ行く際に、美しい女性 North Wind の膝の間を通り抜ける必要が有り、死が「出産・誕生」イメージを以て描かれている。この作品では、North Wind と Diamond の擬似的な親子関係によるものであるため、“The History

of Photogen and Nycteris”における、母娘の繋がりを通して表現された「誕生」としての死は、一見見えないものではあるが、より強いメッセージ性を以て読者に作者の死生観を伝えてくれるのである。*At the Back of the North Wind*における「出産・誕生」や「死」と女性像に関しては、拙論「George MacDonald の *At the Back of the North Wind* における『死のドア』と『生のドア』」を参照のこと。

35. MacDonald は説教集 *Unspoken Sermons* に収められたものの1つ “Life” において、“When most oppressed, when most weary of life, as our unbelief would phrase it, let us bethink ourselves that it is in truth the inroad and presence of death we are weary of. When most inclined to sleep, let us rouse ourselves to live” (165) と述べている。死後の生に着目されることが多いが、MacDonald は力強く生きる重要性を物語や説教の中で主張しているのである。

参考文献

- 安藤理恵子. 「ジョージ・マクドナルド作品における Dualism (二元性) —男性対女性」『児童文学研究』30 (1997): 53-65.
- Dearborn, Kerry. “Bridge over the River Why: The Imagination as a Way to Meaning.” *North Wind* 16 (1997): 29-40; 45-46. <<http://www.snc.edu/northwind/archive.html>>
- Gaarden, Bonnie. *The Christian Goddess: Archetype and Theology in the Fantasies of George MacDonald*. Madison: Fairleigh Dickinson UP, 2011.
- Gimbutas, Marija. *The Civilization of the Goddess: The World of Old Europe*. NY: HarperCollins, 1991.
- Hein, Rolland. *The Harmony Within: The Spiritual Vision of George MacDonald*. Chicago: Cornerstone, 1999.
- Jarrar, Osama. “Language, Ideology, and Fairytales: George MacDonald’s Fairy Tales as a Social Critique of Victorian Norms of Sexuality and Sex Roles.” *North Wind* 28 (2009): 33-49. <<http://www.snc.edu/northwind/archive.html>>
- 香川せつこ「ヴィクトリア朝の家庭教育と女子教育—『家庭の天使』像の揺らぎと親子関係」『子どもの世紀—表現された子どもと家族像』神宮輝夫、北本正章、高田賢一編著、京都：ミネルヴァ書房、2013年。125-44.
- 隈部歩「『リリスでさえも出産によって救われるだろう』—ジョージ・マクドナルドの「リリス」における生命の輪の継承と新生の可能性」『九大英文学』第56号(2014): 15-34.
- . 「George MacDonald の *At the Back of the North Wind* における『死のドア』と『生のドア』」『Tinker Bell 英語圏児童文学研究』No. 61 (March 2016): 29-42
- . 「珠を持った乙女の成長—George MacDonald の *Phantastes* における女性像と死生観」『Tinker Bell 英語圏児童文学研究』. No. 62 (March 2017): 49-63.
- ルルカー、マンフレート『聖書象徴事典』池田紘一訳、京都：人文書院、1988年。
- MacDonald, George. “The History of Photogen and Nycteris: A Day and Night Märchen” 1879. *The Complete Fairy Tales*. Ed. U. C. Knoepfmacher. London: Penguin, 1999. 304-41.
- . *Phantastes*. 1858. Ed. John Pennington and Roderick McGillis. Hamden, CT: Winged Lion, 2007.
- . “The Imagination: Its Functions and Its Culture” 1867. *A Dish of Orts: Chiefly Papers on the Imagination, and on Shakespeare*. Miami: HardPress, 2010. 1-23.
- . “The Carasoy” 1871. *The Complete Fairy Tales*. Ed. U. C. Knoepfmacher. London: Penguin, 1999. 189-224.
- . *The Princess and the Goblin and The Princess and Curdie*. 1872, 1883. Ed. Roderick McGillis. Oxford: Oxford UP, 1990.

- . *The Wise Woman, or the Lost Princess: A Double Story*. 1874. *The Complete Fairy Tales*. Ed. U. C. Knoepfelmacher. London: Penguin, 1999. 225-303.
- . "A Sketch of Individual Development." 1880. *A Dish of Orts: Chiefly Papers on the Imagination, and on Shakespeare*. Miami: HardPress, 2010. 24-39.
- . "Life." 1885. *Unspoken Sermons: Series I, II, and III*. N. p.: Nu Vision, 2009.
- . *Lilith*. 1895. Grand Rapids, Michigan: Wm. B. Eerdmans, 2000. 162-70.
- MacDonald, Greville. *George MacDonald and His Wife*. 1924. Whitethorn: Johannesen, 2005.
- Marshall, Cynthia. "Allegory, Orthodoxy, Ambivalence: MacDonald's 'The Day Boy and the Night Girl.'" *Children's Literature* 16 (1988) : 57-75.
- 松村一男、森雅子、沖田瑞穂編『世界女神大事典』東京：原書房、2015年。
- McGillis, Roderick. "'A Fairytale Is Just a Fairytale': George MacDonald and the Queering of Fairy." *Movels & Tales: Journal of Fairy-Tale Studies* 17 (2003) : 86-99.
- Mitchell, Sally. *The New Girl: Girls' Culture in England 1880-1915*. New York: Columbia UP, 1995.
- Prickett, Stephen. "The Two Worlds of George MacDonald." *For the Childlike: George MacDonald's Fantasies for Children*. Ed. Roderick McGillis. Metuchen, N.J.: Scarecrow, 1992. 17-29.
- Raeper, William. *George MacDonald*. Tring: Lion, 1987.
- Segal, Robert A. *Myth: A Very Short Introduction*. Oxford: Oxford UP, 2004.
- Soto, Fernando. "Kore Motifs in the *Princess* Books: Mythic Threads Between Irenes and Erynys." *George MacDonald: Literary Heritage and Heirs*. Ed. Roderick McGillis. Wayne: Zossima, 2008. 65-81.
- Sundmark, Björn. "'Travelling Beastward': An Ecocritical Reading of George MacDonald's Fairy Tales." *North Wind* 27 (2008) : 1-15. <<http://www.snc.edu/northwind/archive.html>>
- Tolkien, J. R. R. "On Fairy Stories." 1964. *Tree and Leaf*. London: Harper, 2001. 1-81.
- 脇明子『少女たちの19世紀—人魚姫からアリスまで』東京：岩波書店、2013年。
- ウェルズ恵子編、大貫昌子訳『狼女物語—美しくも妖しい短編傑作選 G・マクドナルドほか—』東京：精興社、2011年。
- Wolff, Robert Lee. *The Golden Key: A Study of the Fiction of George MacDonald*. New Haven: Yale UP, 1961.

